

0～2歳における要求—拒否と自己の発達

山 田 洋 子*

有意味語の発生を考察する際には、音声発達のみではなく、認知構造やコミュニケーション様式の発達を含むより多面的な機能を視野に入れる必要がある(山田1980)。

最近, Bruner (1978) や Bates (1979) らを中心として、語用論 (pragmatics) の観点から乳児期の言語発達が考察され始めている。この見地では語義的意味 (semantics) の研究と異なり、どのような文脈や場面でどのような語の使い方をするか調べることで乳児の意図する意味を把握しようとする。乳児の発した語を機械的に品詞や語義的意味に分類しても、乳児の側からの主体的な外界の意味づけ方や乳児の内に形成される認知的枠組の研究にはほとんど役立たないので、彼らのアプローチは大変意義深い。しかし、彼らは乳児期の認知構造やコミュニケーション様式の発達を扱う際にも、「言語」という視点から、つまり「前言語的行動」としてそれらを眺めるために、動作や身振りのもつ役割も、言語に先立つものとして、言語に連結される部分のみを視野に入れがちである。

音声言語を動作や身振りの一段上に単純に位置づけるのではなく、音声言語も種々の行動形式の発達の一部と把握する方が、乳児の生活全体の中で生じる変化をより明確にできると考えられる。ある種の動作や行動形式が、どのような場面でどのような使われ方をするのか「動作作用論」とでもよぶべきアプローチが必要であろう。特に構音能力を持つにもかかわらず有意味語の発達が貧弱な自閉症児などの障害児の基礎研究としては、音声発達以外の側面が重要なので、このアプローチが有用だと思われる。

本研究では、乳児が自己の要求を他者に伝える行動(要求行動**)と自己のおかれた状況や他者の要求を拒否する行動(拒否行動)を、次の2点から考察する。第

1に、要求—拒否において用いられる行動形式が発達のどのように変化するかを調べる。第2に、要求—拒否行動と乳児の自他の分化との関係を調べる。

乳児は、父、母、祖父、祖母、きょうだい、仲間、他人などさまざまな人々との関係のネットワークの中で生活している。乳児期初期では、乳児にとってまわりの人々は未分化だが、乳児の快、不快などの興奮の表出は他者に何かの影響を与え、他者の働きかけは乳児の興奮や抑制をよびおこすという形で乳児に伝えられる。したがって初期において乳児は、ある種の情動的共鳴によってまわりの人々と溶け合った共生状態にあると考えられるが、自己の要求を表現し、他者の要求を拒否する行動の中から自他の分化が生起すると考えられる。

最近 Lewis と Brooks-Gunn (1979) は乳児の鏡や写真での自己弁別や他者弁別を組織的に調べ、それが1歳代で可能になることを明らかにした。このような認知的概念としての自己の研究は重要だが、それ以上に、山田 (1980) が指摘したような、コミュニケーションの中で形成される情動—認知コンストラクト (Izard, 1978) としての自己が研究されねばならない。

「No」を意味する首振りの身振りは、Spitz (1957) によって、コミュニケーションにおける最初の抽象作用であり、なおかつ自己覚知 (self awareness) の開始であると正しく位置づけられたにもかかわらず、前言語的コミュニケーションから言語的コミュニケーションへの発達と自己の形成が統一的に研究されることは従来ほとんどなかった。この問題への接近は方法論上の困難が大きいが、乳児の要求—拒否行動の発達を調べることで最もよく説明されてゆくにちがいない。

本研究の主眼は仮説の検証ではなく、現実のより良い記述、特に微妙な質的变化過程や行動相互の関係を全体的一力動的に把握し、今後の研究の枠組を作製することにある。したがって調査法や実験法や組織的観察法を用いて大勢の子供の一般的発達過程を量的に追跡することからではなく、子供と生活体験を共にしながら日常場面で自発的に生起する子供の行動を注意深く観察、記述す

* 愛知淑徳短期大学

** 「要求」は生理的欠乏状態を示す need の訳語として用いられることがあるが、ここではそうではなく、日常語に近い用法で、欲求行動 (wanting) と請求行動 (asking) を総称した用語として用いる。

ることから研究を開始したい。心理学が科学的方法で研究されねばならないことは言うまでもなく、日誌法やエピソード記述法を用いた観察には、主観的解釈による歪みが生じる可能性、一般化困難など多くの欠点がある。しかし他の方法では把握困難な側面をとらえるための有力な方法の1つとして活用できるのではないだろうか。

川喜田(1973)は、科学を、文献と推論を重視する書斎科学、仮説検証を重視する実験科学、仮説発想を重視する野外科学の3つに分類している。実験科学と野外科学は共に経験科学だが、前者が再現可能な少数の要素を取り出す分析的性格を持つのに対し、後者は一回性を帯びた複雑な諸要素のからまった対象を扱う複合的性格を持つ。この3つの方法は相補的なものだが、従来の心理学の方法論では、仮説からどのように検証するかの手続きが高度に洗練されたのに比較すると、複雑な現実生活にどのように切り込んで問題を整理し仮説を導き出すか、についての体系だてた方法論は少ない。教育心理学において野外科学のアプローチはもっと重視されるべきであり、本研究は方法論的にもその可能性を探る1つの試みといえる。

方 法

1977年7月6日生れの筆者の長男：有吉(Y)の出生時から2歳半までに母より観察、記録された日誌を資料に用いた。Yの出生時の家族は父、母(筆者)、祖父、祖母、姉(3歳7か月)であった。昼間は主に祖母が養育にあたったが、1歳8か月から2歳2か月18日まではカナダに移住し、1歳10か月からは保育園に通園した。

従来の日誌研究によく見られる「いつ」「何ができたようになったか」という技能獲得の記録には重点を置かなかった。また個性記述そのものが目的の事例研究ではないので、種々の検査を用いて被験児の個性を浮きぼりにする作業にも重点を置かなかった。ある種の行動がある状況ではどのような現われ方をし、別の状況ではどのように異なるか、また、類似した状況である種の行動がどのように別種の行動へと変化するか、ある行動と別の行動がどのような関連をもって現われるか、など状況や文脈と行動の記述に観察の重点を置いた。

全行動の記録は不可能であり、言語機能の基礎になる行動機構は何かという関心によって自ずから限定された領域が観察されたが、最初から枠組を設定することはせず、関連しそうな事柄はできる限り記録した。本報告はそのうちごく一部を後から整理したものである。また別に、最低各月1回、VTRを用いた家庭での組織的観察と実験室での実験(それらの一部は、山田1980, 1981を

参照)が同一児を対象に行われており、日誌は多様なアプローチの1つとして位置づけられている。

記録は、観察時のメモとその日の終りの1日あるいは数日を通した記録の両方を用いた。部分的には、VTR、8ミリ撮影、テープレコーダーによる記録で補足した。同一場面を日誌記録とテープレコーダー記録で比べると、次のような相違がみられた。

(2:0:28)*日誌：本を読みながらのやりとりをテープレコーダーにとる。レコーダーをさわったがって困るので止めようとする。「モット モット」と言ってレコーダーを引っぱる。母が「だいじ」と言って片づけようとする。「イヤダ イヤダ」と言いながらレコーダーをたたくので、母が「だめ」と怒ると、「ママ イイノ」と言って泣く。

(2:0:28)テープ記録：Y「モット モット」母「もういいの もういいのね」Y「モット モッチョ モッチョ」母「いいの いいのやらなくて」Y「イヤダ」母「やらなくていいの」Y「イヤダ ノオー」母「たたいて いや」Y「モットオー」母「テープレコーダーにさわってだめ だいじ」Y「イヤダ イヤダ」母「たたいて だめなの」Y「イヤジャ ママ ママ イイノ ママ イイ ママ イイノ」

日誌記録では、発音の微妙な変化や語順、発語の回数、時間間隔などおよそ数量的なデータをとるのは不適當である。冗長さがなくなり、簡潔化され筋道を立てた記録がなされる傾向もある。しかし注意深く記録すれば、何がどうしてどうなったかという、エピソードの質そのものは十分利用できるといえる。

日誌記録のエピソード毎に番号をつけ2700枚のカードにし、各種行動別(例えば「泣き」「手で払う」「首振り」「指さし」など)、必要に応じて状況や対象別(例えば「食事場面」「姉」など)に関係するカードを全部抽出して書き出して整理した。

結果と考察

I. 要求一拒否の行動形式の発達的变化

1. 全般的発達

要求と拒否行動は表裏一体ともいえるべき非常に密接な関連をもつ。何かを要求することは転じて現状では不満であること、つまり現状の拒否や否定を表わすことになるからである。従って両者の区別は便宜的なものにすぎない。また乳児の内に実際に生起している内的状態そのものは外から観察できないので、本研究で言及できるの

* () 内は観察された年；月；日齢を示す。

TABLE 1 要求—拒否表現に用いられた主な行動（食物に関する場面、初発月齢のみを示す）

月齢	0—1	4	6	7	8	9	10	11	0—1	1—1	1—2	1—3	1—9	1—11	2—2
要求行動	- 泣き - イライラした発声 - 口を動かす - 口の開閉 - リーチング		- 身をのりだす - 取りに行く (寝返り、歩行器、這行、1人歩きで)	- 指さし - 提示 - 手渡し - 母の手を引っぱる 「マンマ」		- 手をさし出す - 食堂のイスをたたく - 特定語で指示 「ブアップ」 (ブドウが欲しい) 「バァー」 (冷蔵庫を開けて)など	- 身振り (ねころぶ) - 一輪乳びんが欲しい、い、吹くしくさ - 一さまし - て欲しい など	2語文 「パン ニュリ ニュリ」 (パンにバターをつけて) 「ピンビ イイ」 (ビスケット欲しい) など	3、4語文 「ユー」 (自分の名前) 「パン ナイナイ」 ピンビ イイ (パンイイ) (ビスケット欲しい) 「ディー」 ピンイイ (ジュースを哺乳びんでのみたい) など	「チョーダイ」「シタイ」を用いた文 「ユー フタアツ (2つ)」 チョーダイ、チー (姉) ナチヨ (なしよ) ユウダケ フタアツ 「ママト イツチョコニ」 (一緒に) ゴパン (ごはん) タベタイ ナア など					
拒否(否定)行動	- 泣き - 不快表情 - 舌で押し出す		- つかもう - としんない - 口をつむる - 手で払う	- 放る - 顔をそむける		- 首の横振り 「ニヤイ ニヤイ」 - 母の口へ押し込む - 隠す 「ヤッー」 (イヤ) - 母の手に渡す	2語文 「ジャー ジャー ナイナイ」 (牛乳いらない) 「ニヤイ」 「イヤン」 「ナン」 などの応答詞	否定詞が中間に入る、3、4語文 「ジャー ジャー ナイナイ ママ」 (牛乳いらない ママという) 「アンブッコ ナイナイ ユーノ」 (半分にするのイヤ 全部ユーのもの) 「ブクブク イヤ マズイ」 (脱脂粉乳はイヤ まずい) など	「ナイ」の助動詞 形容詞の否定表現 「ユー パナナ イラナイ」 「ジゴ (リンゴ) ナイネエ」など 「ダメ」「チガウ」などの否定表現 「ママ チュプーン チョーダイ チガウ チガウ チュプーン チガウ フタアツ タクチャン、ママ ミタイノ……」 「おはしのこと？」 「ン。オアチ (はし) チョーダイ」						

は、外部から観察可能であった行動形式のみである。

比較的類似した状況で行動形式がいかに発達的に変化したかをみるため、食物に関する場面のみを取り上げTABLE 1に整理した。TABLE 1に示したのは初発月齢であるが、その出現順序のみを問題にすると、泣きに始まり、口や手や身体を用いた実際行動、指さしや首振りなどの身振り、言語の順で生起した。しかし後述する「泣き」のように、ほとんどの行動形式は途中で消失することなく、後の月齢でもひき続いて観察されたので、発達に伴って、前の行動が後の行動に置き換わったというのではなく、多種の行動が併用されるようになったといえる。

このような各種行動を併用したり組み合わせたりして複雑な表現をとる行動の複合化は、1歳2か月頃から1歳8か月頃までがピークであった。その後(1歳9か月頃から)は、音声言語が主で身振りは補助的に用いられるだけになった。この変化期は、音声言語がさかんになり自発語が急速に増加し(語彙数の算定は複雑な問題を含むが、派生的変化を入れず、1歳8か月25日で約40語)、2語文が出現した時期にあたる。

例えば、Yがダンスの上にあるパンダのぬいぐるみを

母に取ってもらったり戻して欲しいと要求する類似場面で、行動形式がどのように変化したかをみると、次のように、各種行動形式を用いて要求していたのが、言語のみで要求するようになった。

(1:3:18) タンスの上のパンダを指し、「ン」「ン」と言うので母が取ってやると、微笑し、次に犬のぬいぐるみを指して「ン」「ン」と言う。パンダをいすに寝かせ、犬を床において両方を指さし「ネンネ」と言う。Yもパンダに顔をくっつけ眠るかっこうをする。しばらくして、パンダを片手につかんでダンスの上を指して「ン」「ン」と言うが、母が応じないと、パンダを抱きかかえて、上へ少し持ち上げるしぐさをして(大きいので実際には持ち上げられないし本気で持ち上げるほど力も入れていない)、母の顔を見、ダンスの上を指して「ン」「ン」と言う。

(2:2:26) Y「ママ クマチャン ホチイ」母「くまちゃん ここにある でしょう」Y「チガウ オーキイノ クマチャン」母「大きいの どこにあるの？」Y「オーキイノ タカイタカイ チテ」母「ああ あそこのパンダちゃんのこと？」Y「ン。パンダチャン トッテ」(指さしを全然用いない)

TABLE 2 拒否・否定を表わす主な行動形式の発達的变化（首振りと「ニヤイニヤイ」を中心に）

		0:11	1:0	1:1	1:2	1:3	1:4	1:8以後の言語表現例
拒否	要求が満たされない時の不快情動を伴う強い拒否や抗議	泣き払う	泣き払う	泣き + 「ニヤイニヤイ」 (1:1:02~)	泣き + 「ニヤイニヤイ」	「ニヤイニヤイ」 泣き	「ニヤイニヤイ」 泣き 他者をたたく	★「イヤダ ユーガヤル ママヤッテ ダメ ユーガヤルカラ」(2:04:00) ★「ダメモン、ママ ダメモン ユータベ タイ ママトッテ ダメモン」(2:04:19)
軽い意味の拒否	イヤイヤゲーム (拒否のあそび)	逃げる	逃げる	首振り (1:0:28~)	首振り	「ニヤイニヤイ」+ 首振り	「ニヤイニヤイ」	
	拒否の返事	—	払う	首振り	首振り + 発声	「ニヤイニヤイ」 + 首振り	「ニヤイニヤイ」 + 首振り	★「ジュースがいいの?」「ウン」「牛乳は ?」「ナン」「水は?」「ナン」(1:8:25) ★「ゆう君 びんもってらっしゃい」 「イヤーン ママガ」(2:00:09)
否定	打ち消し	払う	払う + 指さし	払う + 指さし	首振り + 指さし 指示語	「ニヤイニヤイ」, 首振り + 指さし、指示語	「ニヤイニヤイ」 + 指さし、指示語	★「チガウ アネ(羽) チガウ」(2:00:28) ★「ママ モウ ガッコウ イケチェン (いかない)?」(2:06:03)
	存在の否定	—	—	—	—	—	「ニヤイニヤイ」	★「オカアチャン イナイ ナイッテチャ ガシテルネ(捜してるね)オカアチ ャン ドコイッタノ?」(2:03:24)

2. 実際行動と身振りの関係

Yの場合、接近する、手を出してつかむ、両手をさし出す、母の手を取ってやらせる、食堂イスをたたく、逃げる、手に取らない、放る、手で払うなどの実際行動が短縮化し、儀式化して自然発生的に身振り表現になることがあった。また、指さし、バイバイの手振り、首の横振りなど社会的に慣用化されており、獲得と同時に特定の人（母など）以外の第3者にもすぐに意味が理解される身振り表現が突然のように出現する場合もあった。この2種類のうちでは後者の方が圧倒的に多く用いられた。

身振りや有意味語が発達すると、実際行動が減少するとは必ずしも言えず、特に1歳5、6か月頃には15語程度の有意味語を話し豊富な身振り表現が可能になったにもかかわらず、来客の持参したケーキの箱を見るとすばやく取りに行き、自分の傍まで運ぶという実際行動をしておいてから、「マンマ」と指さして母を見るなど、状況に応じて実際行動をすることも顕著にみられた。また、禁止されている事柄（冷蔵庫の扉を開ける、テーブルレコーダのスイッチを押す、コンセントにプラグをはめる、テレビのスイッチを入れる、クリスマスツリーの玉を取るなど）への要求は指さしや言葉などの間接的表現ではなく、直接母の手を取りに来て、母の手でやらせようとした。

以上のように、実際行動は複合化し併用されたので、発達に伴って重要性が減少したわけではなかった。しかし実際行動そのものも質的に変化した。例えば手で払う行動は、初期（7:08開始）には事物を直接除く行為であったのに、1歳頃から他者の手を払うようになり、1歳2か月24日頃から他者の顔や体を払うという具合に変化した。目の前の障害物を直接除く行為から、障害をも

たらした源である人をめがけてたたいたり押したりして積極的に攻撃を加える行為に変わったわけである。「事物を放る」行動でも同様の経過をたどった。

3. 身振りと音声言語の関係

身振りと音声言語の関係を調べるために、拒否の意味を表わす「首の横振り」と「ニヤイニヤイ [næi, næi]」の語の出現経過をTABLE 2に整理した。両者は1歳1か月前後に3日違いでほぼ同時期に出現したが、その使われ方には次のような違いがあった。

「ニヤイニヤイ」は強い不快情動を伴う泣きと共に生起することが多く、「イヤイヤゲーム」のような軽い意味の使用例は観察されなかった。「イヤイヤゲーム」と名づけたのは不快情動を全く伴わず、相手の働きかけをわざと拒否して楽しむ遊びで、母がおしめを替えようとすると這行で逃げ出して微笑し、母が知らん顔をしていると戻ってきて母の顔をのぞき込み、母が「行ってはダメ」と言うのと、大喜びで逃げる、というような繰り返しのやりとり行動である。Yは、「這行で逃げる（0:9:27~）」「事物を放る（0:11:05~）」など多様な行動形式をこのゲームに用いたが、次例のように「首の横振り」は、最初の出現から6日目には、このゲームに使用され始めた。また同時期に、話かけに対する返事の首振りもみられた。

(1:1:04) 2階の廊下でうちわの上に足を載せて、すべってころんで泣く。部屋へ連れて行っても泣きながら「マンマ」と言い、寝ころんで泣きつづける。母が「マミー」の付録の絵カードを見せて、「ニャーニャがついているよ」など話かけて1枚ずつ見せてゆくと、始めは泣いたまま首を振っている。繰り返していると、そのうちに母がカードを見せて話をするたびに首を振って微

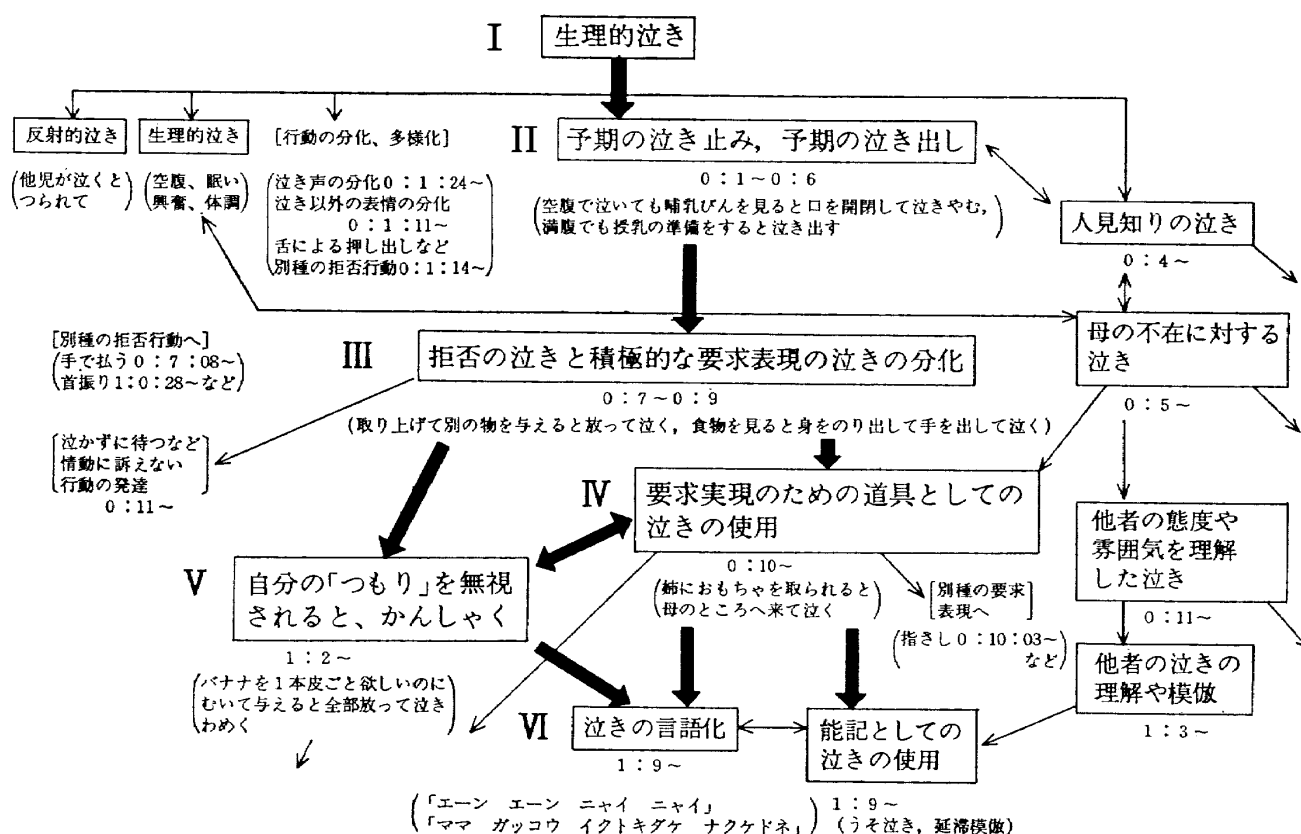


FIG. 1 泣きの機能的変化の図式

笑する。絵の1つ1つを指さして、母の顔を見て「アッアッ」と言い、母に名前を言わせ、母が名前を言うたびに首を振って微笑する（後半では拒否の意味はうすれ、ゲームになっている）。

このような、拒否の情動と結びつかない首振りとは、情動と結びついた首振りよりも拒否の意味（所記）とそれを表現する媒体（首振り—能記）が分化しているという意味で記号としての使用に近く、より高等と考えられるが、「ニヤニヤ」の語が「イヤイヤゲーム」に始めて用いられたのは、首振りよりも2か月以上遅れた。「ニヤニヤ」が「イヤイヤゲーム」に用いられ始めるとほぼ同時に、TABLE 2のように拒否以外の意味の否定（打ち消し、存在の否定）を表わす「ニヤニヤ」が出現した。

以上のように「ニヤニヤ」の語は、強い不快情動と結びついた時期から、常に首振りと共に用いられる時期を経て、情動と結びつかない言語記号として使用されるようになった。首振りの方が、情動から分離しているという意味で、先に高等な機能を担っていたことは注目すべきである。なお、1歳4か月以降の首振りは、1歳6か月頃首を何度もぐるぐる振る強調したしぐさとして復活したことはあったが、「ニヤニヤ」の補助的な身振りとなった。その後の否定表現は、TABLE 1のよう

に、1歳8、9か月頃から「ニヤニヤ」以外にも種類の否定詞を用いて表わされるようになった。

4. 「泣き」の機能的変化

「泣き」は最も初期からみられたが、声の調子の変化や多様化を生じたものの、発達に伴って、別の行動に置き換えられるために重要性をなくすとは必ずしもいえなかった。その機能的変化をFIG. 1のように整理した。例えば、特定の行動を取り上げてⅡかⅢかどちらの段階かと問われるならば、明確には分類できない。後の段階になっても前段階の行動は消失しないし、あらゆる中間段階やバリエーションが存在するからである。しかし、Ⅱと比較し、明確に異なる新しい特徴をもつ行動が新たに出現するならば、それをⅢと区分することは可能である。この段階に対する考え方はPiaget (1936) から学んだもので、月齢は参考のため記しただけで一般的標準ではない。

FIG. 1のように、「泣き」というほぼ同一の行動で表現される場合にも、機能的変化が認められた。第1の変化は、不快情動の直接的表出から、「泣き」の道具的使用、さらに能記としての使用への方で、これは情動から分離し、距離化あるいは抽象化する過程と考えられる。それはまた、乳児が泣かずに他種の行動形式（手で払う、首振りなど）を駆使できたり、泣かずに待てるようにな

る過程、つまり乳児が自律的に自分の情動や行動を制御し始める過程と考えられる。Ⅳ段階では、下記の例のように「泣き」を言語化することで自分の行動を制御するようになった。

(1:10:22) 朝、保育園に連れて行こうとすると、家を出る前から泣き出す。「ガッコウ ナイナイ ママ」(保育園いかない、ママという)「ガッコウ ナイナイ」と言って泣く。しかし車に乗せて送ってゆく途中で泣きやみ、「チーモ ガッコウ (姉も学校)」「エンエン ナイナイ (泣くのはやめ)」と言う。そして「トットモ ガッコウ (おとうさんも学校)」「ママモ ガッコウ」「チーモ ガッコウ」「ユーモ (ユー自分の名前)」と言う。(「ユーモ」以外に他人に「モ」をつける用法は、この日の前日はじめて出現したもので、Ⅴとしては新しい用法で精いっぱいのことを表現した)。

第2の変化は、強い不快情動をひき起こす対象の変化で、これについてはⅡで考察する。

Ⅱ. 要求一拒否行動と自他の分化

要求一拒否行動と自他の分化は相伴って発達するようである。

FIG. 1の泣きの段階Ⅳでは、下例のように、⑦目的を達すると即座に急に泣きやむ、④泣きを用いる相手が分化している、②相手の出方や状況で泣き方が変化する、などによって、泣きが道具的に用いられていることが判る。

(1:0:18) 自分でころんで打った時には少々のことでは泣かないのに、姉が軽く押すと激しく泣く。しかしすぐ側の姉に向かって泣くのではなく、3m以上も離れた所にいる母の顔を見てから泣き声を上げる。

(1:2:27) Yが針をさわりに行くので、母が「いたいだからだめ！」と言ってYの手をたたくと、すぐには泣かないで、祖母の所へ行き、自分の手を母がしたのと同じようにたたいて祖母にその手をさし出しながら泣き出し、「アアア」と言って母を指さす。

(1:5:15) 最近、母にベッタリとくっつき、母がいなくなると泣くことが多い。おとなしく牛乳を飲んでいても側に母がいるかどうか時々横目をして、目のみで確認する。母が少しでも立ち上がりかけると、突然大声で泣きわめき始める。母がYの側に座るとピタリと黙り、向き直って牛乳を飲み始める。目のみ時々横目にし、母が立ち上がりかけると、すぐ泣き出す。

特に1歳2か月頃からは、泣き行動に限らず、伝達対象と伝達すべき内容が一層明確化してきたところに特徴がみられる。

下例のように、この事柄はこの人に伝えねばならないということがはっきりしてきたのである。

(1:2:05) 急に激しい勢いで雨が降ってくると、しきりに窓の外を指さして、母に「ガァーガ ガァーガ」と言う。母が「雨降ってきたね。ザァーザァーね」など答えてやる。風呂から出たばかりの祖父が廊下にいると、少し祖父の方へ近付き、祖父に向かって窓を指さし、しきりに「ガァーガ ガァーガ」と言う。祖父が気づかないので、母が代りに「雨ね」など言っても見向きもしないで祖父の方を見ては指さして「ガァーガ」と言い続ける。やがて祖父が気づいて「ゆー君雨が降ってきたね」と言うと微笑して、再び窓の方へ戻ってくる。

(1:2:05) 母と姉がはさみを使っていると、そのはさみを非常に欲しがった。1時間ほど後、偶然に絵本ではさみの絵を見つけると、何度も指さしては「ン」「ン」と母に見せにくる。その絵本を持って、廊下、居間、台所と母の後を追って来ては、何度も何度も母に見せる。母が食器を洗うために、父が母のかわりに相手をしようとして母と全く同じように「はさみね、チョキチョキするね」など言うのだが納得せずに、母の顔を見ては、はさみを指して「ン」「ン」と言いつづける。

またこの時期には、枕など家族の持物をセットにして並べたり、次々に指さして「誰々の」と言ってもらうことを特に好むようになった。さらに、家族の中でも、父、母、祖父、祖母、姉、各々の役割りがYにとって認知できるようになってきたらしく、玩具が壊れた時は祖父の所へ、仏壇の上の菓子を要求するのは祖母の所へ、眠い時には母の所へなど、各々の人に対して異なる種類の行動を使い分けるようになった。

特に姉に対する関心には大きな変化がみられたが、姉への行動を中心にこの時期の変化をまとめたのが、TABLE 3である。Yは早期から母と姉の知覚的弁別が可能で姉に対するポジティブな関心は高かったが、姉は母の不在時には母の代わりになりうる存在であった。しかし、1歳前後から姉へのネガティブな反応も出現し始めた。この頃からYは、何でも姉のやることを模倣したり、姉と共に母のいやがることをやると大喜びするなど、姉を大人とは異なるおもしろさを持つ子供同志の仲間であると認知すると同時に、姉が母のひざに座ると怒る、母と姉が2人で話をしていると怒るなど、ライバルとしても認知し始めたように考えられる。姉を、保護者としての母とは明確に区別し、自己と同列に並ぶ「子供」だと認め始めたのだろうか。家族を始め周囲の人々の役割が認知できることと、自己を「子供」として位置づけることとは大きな関連がありそうである。

TABLE 3 Yの他者との関係の変化(姉との関係を中心に)

三形成関係の (およその月齢) (0:9~0:11)	★提示, 指さしなどで人の注意をひこうとする。家族が集まると, どのような大声を上げ始めるなど, 注目されると喜ぶ。 ★母への後追いなど母が特別の対象であるにもかかわらず, 提示や手渡しやあそびの相手は姉でもよく, 姉が母の代理になりうる。 ★模倣の対象として姉には母以上の関心[嫌いな頭洗いや姉がやるとする。姉と同じ場所で同じ物を持ちたい] ★姉にたたかれても(Yはあそんでくれていると思うのか)よろこんでいる。
他 分 者認 化の 知の 情的 開 動 始 (0:11~1:1)	★母への甘えが強くなり, 父, 祖父, 祖母, 姉, いずれも代理にならない。 ★子供仲間としての姉 模倣の対象としての姉は非常に強力[嫌いなものも姉が食べていると食べ始める] ★ライバルとしての姉 <母-姉>の関係に怒る。3人一緒に, <母-Y>, <姉-Y>ならばよい[母が姉を抱くと泣く, 母が姉に話しかけると泣き出す, 母が姉と風呂に入るときちがいの様に泣きわめく, 姉にたたかれると痛くなくても泣く]
他に使 者応い のじ分 役だけ 割 (1:1~1:3)	★伝達対象の分化[ほめてもらうのは祖父母のところへ, 母にしかられると祖父母のところへ] ★他者の所有の理解[鍵は父のもの-母が受けとると怒る] ★子供仲間としての姉[姉と互いにふざけ合いをして大喜びする。母にしかられても姉とあそぶのを好む] ★ライバルとしての姉[欲しいものは大人の所へ要求しに来て姉の所へは行かない。姉が手伝おうとしても(取られると思うのか)泣く。母と姉の話の中に入り込む]
他 応 じ た 意 図 や 分 け 状 況 に (1:3~1:5)	★言語による人の区別の明確化, 所有の理解[家族のまくらを次々に指して「誰々の」と言ってもらうことを好む。単に「まくら」と答えるだけでは納得しない。イスなど自分用のを使いたがる] ★おだてにのる, 他人の気嫌をとろうとする[服をほめると嫌がっていても着る。禁止されている事柄は大人の手を取ってやらせようとする。しかられると抱きつく, 声の調子を変えるなどで気嫌をとろうとする] ★子供仲間としての姉[2つもらうと1つを姉に渡しに行く。姉の手伝いを喜ぶ。姉が母をたたくとすぐ模倣するなど姉とともに, 母のいやがることをやって大喜びする] ★ライバルとしての姉[大人は自分のものにさわってもよいが姉がさわると怒る。姉が眠っていたり, 泣いていた, 姉の形勢不利なときに姉をたたいたり髪をひっぱりに行く]
その後の主な変化	★約1歳9か月～ ・自他の関係の言語化の開始 「ユー (自己の名前)(1:9:27)」「ユー ノ チー (姉の名前)ノ (1:10:10)」「ユー モ (1:10:18)」「チー モ (1:10:21)」「チー ガ (1:11:16)」「ユー ガ (2:00:02)」「チー ハ? (2:00:03)」「チー ト (2:00:05)」「ユー ハ? (2:00:16)」 ★約2歳1か月～ ・自他の関係の言語化 「オ・トウチャン チンキチ ト ダンダ アイル」「オ・カアチャン ト ジャー ジャ ノンデ ネンネ カワイイ オ・カアチャン (2:01:15)」「(おとうさん, 真吉と風呂に入る。おかあさんと牛乳飲んで寝る。かわいなおかあさん)」「チー チイチャイノ ユー オオキイノ イイノ (2:01:29)」「(チーは小さいの, ユーは大きいのが欲しい)」「チー チュキ ダケド チュコチ イジワルスル (2:04:05)」「(チーは好きだけれど少しいじわるする)」 ★約2歳3か月～ ・他者からみた自己の意識化 - 公園で「イタル クント ナオチャン オウチ デ ケンカ チテルカモ チレン。ユークン イナイナイッテ (2:03:28)」「(いとこの到君と直ちゃんがお家で, 自分がいないのでけんかをしているかもしれない)」「キチャ ユー チュキダカラ マチマチ チテケレルノ? (2:03:26)」「(汽車はユーが好きだから待っていてくれるの?)」

* 山田 (1978) 参照

さらには, 大人がさまざまな努力をしても中止できなかった哺乳びんの使用を子供仲間の一言でピタリと止めた下記の例のように, 大人の承認や賞賛よりも, 子供仲間での評価の方が重視されるほどにもなった。

(2:5:02) 母とYとで姉の保育園へ遊戯会を見に行く。姉の友達2人(3歳)と一緒に見る。Yがまだ哺乳びんを使用しているのを見て, 2人が「ゆう君あかちゃ

んだねえ, まだ哺乳びんで飲んでるの」と言った。その時は「ユー アカチャント チガウ」と言うだけであったが, その夜「ユー オチメ チュルノ イヤ」と言うので, 母が「おしめしないのなら, ジャー ジャ (牛乳) もなしよ」と言うと「ユー ジャー ジャ ノマズニ ネンネチュル」と自分から言い, 本当に飲まずに母の手をつかんで寝た(今までも自分から同様のことを言い出し

たことはあったが、眠るまぎわになると、どうしても飲まずにはいられなかった。)翌朝「ユー モウ アカチャン ジャ ナイヨ」と言う。さらに翌日「ユー モウアカチャン ジャ ナイ」「チー (姉) ト オンナジネ」と言う。

1歳2か月頃からの特記すべきもう1つの大きな変化は、FIG. 1の段階Ⅴの出現である。段階Ⅳは現実的に要求が実現しないことに対する泣きであるのに対し、Ⅴは下記の例のように、要求実現は2の次で本当に欲しいものが与えられても、それを拒否してまでも泣き、ひどくなると完全に本末転倒になり、かんしゃくのためのかんしゃくになることが相違点である。この時期、結果的には同じものが与えられても、自分の思った通りの手順をふんで与えられないと怒ることが非常に多くなった。この本人の「つもり」は、周りの人間にはささいなことと見過ごされ、本人の激しい抵抗にあって始めて「つもり」の存在が推測できることも多かった、自分の「つもり」が現実の要求実現よりも優先するこの現象こそ、自己の形成を考察する上で最も重要な現象と考えられる。現実生活の中で目標物を手に入れるために目標志向的な行動をしたり、妨害物を除いたり、他者の働きかけを拒否したりする行動の中にも「自己」が存在するかもしれないが、それらは自己を仮定しなくても説明できる。しかし、この現象に至って始めて、現実の利益を捨ててまで守るべき大切なもの、現実の利害にかかわらずそれを無視されるとたまらなく不快になるものが、乳児のうちに芽ばえ始めたことが示されるのである。

(1:3:24) Yがキャラメルコーンを袋ごとつかんだので、母が取り上げて袋の中から1つだけ取って差し出すと「ニャイ ニャイ」と言って大声で泣く。そりくり返って泣きわめき続けるので、再び袋ごと渡すと、その

袋をつかんで「ニャイ ニャイ」と言って首を振り、泣きながら玄関の土間へ行き、力いっぱい投げつけて放ってしまい、さらに泣きわめく(本当は食べたくてたまらなかったのに、袋ごと欲しいという最初の「つもり」が入れられなかったので全部捨ててしまった)。

(1:6:06) 夜中に目覚めて「ジャージャ(牛乳)」と言いながら激しく泣く。母が牛乳を哺乳びんに入れて持ってゆくと、飲もうとしない。哺乳びんを手にとってみるのだが、飲もうとしないで「ジャージャ ジャージャ」と言って哺乳びんを放り投げて泣く。そして母の手をつかみ、寝室の出口の方を指して(「あちらへ取りに行け」というようなしぐさをしながら)「ジャージャ」「ジャージャ」と言って泣く。何度試みても泣きつづけるので、母に出て行けと言っているのかと考え、母が出口から出て行き、トイレに行ってから帰ってみるがやはりダメである。いろいろな試みをした後、ついには哺乳びんを母がつかんでいったん廊下へ出て行き、しばらく時間をおいてからその同じ哺乳びんを持ってくると、すぐ泣きやんで飲み始める(母が哺乳びんを取りに出口から出て行き、その後で牛乳をもらうという手順をふまねばいけなかったらしい。最初寝ぼけていたので、母が行ったのを知らなかった)。

討 論

一児の0歳から2歳半までの日誌記録から、Ⅰ. 要求—拒否に用いられた行動形式の発達的变化、Ⅱ. 要求—拒否行動と自他の分化について整理した。その結果を先行研究の知見とともにまとめると、TABLE 4のように概括できる。

行動形式の発達に関しては、第1に、前言語期から言語期へと発達する場合に、ある種の行動形式が別の行動

TABLE 4 本研究で得られた結果の概要

およその年齢	約9か月～	約1歳2か月～	約1歳9か月～
要求—拒否に用いられる主な行動形式	・感覚運動的直接的行為	・身振りを中心に有意味語を含む各種行動の複合的使用	・言語中心で身振りは補助
泣きの機能の発達的变化	・泣きの道具的使用	・現実の要求実現よりも自己の「つもり」を優先 ・怒った時、妨害物ではなく他者を攻撃	・言語による泣きの統制 ・能記としての泣き(うそ泣き)
自己と他者との関係	・三項関係(自己—媒介物—他者)の形成	・伝達対象としての他者の分化 ・他者の役割や意図に応じた行動形式の採用 ・姉を子供仲間であり、ライバルでもあるとみなす行動	・自他の関係の言語化 ・他者からみた自己の意識化
参 考	・愛着対象の形成(Ainsworth) ・感覚運動的手段—目的関係の形成(Piagetの第4段階) ・コミュニケーションにおける相互モードの形成(Bruner)		

形式へと単純に置き換わるのではなく、多様な行動が複合的に用いられるようになることがわかった。これは対照的な方法を用いた大浜他(1981)の研究と一致する。第2に、複合的な行動形式の使用から、言語中心の使用になるのは、有意味語発生の時点(約1歳頃)ではなく、自発語の数が飛躍的に増大したり2語文が出現する時期(約1歳9か月頃)であった。第3に、身振りは有意味語に常に先行して生じるわけではなかった。両者が、ほぼ同時に生じる場合にも、情動から分離した能記として用いられるという意味で身振りの方が言語よりも先に高等な機能を担っている場合があった。

これらの結果から、身振りと言語の関係は直線的に移行する関係ではないし、言語を身振りよりも常に上のレベルの行動と位置づけることはできないと考えられる。一語文期の言語は、せいぜい身振りと同程度の水準であり、次の段階の言語とは生活の中で果たしている役割が質的に異なるのではないだろうか。言葉の初発時期はきわめて個人差が大きい、一語文期では、ある事柄を身振りで表現しても言葉で表現してもよいのだろう。そうだとすれば、1歳半検診では、言葉の有無や言葉の数よりも、乳児の生活全体の中で各種行動形式の使われ方を総合的に評価することが重要になるだろう。

なお行動形式の発達で特記すべきことは、同一の行動形式が使用される場合にも、その中に機能の変化が認められたことである。泣きの頻度は発達に伴って減少する(Bell & Ainsworth 1972, 斉藤他 1981)ので、泣きの減少とコミュニケーションの発達は単純に結びつけられる傾向がある。しかし、量のみではなく、泣きがどのように用いられるかその機能の違いが考察されねばならない。

前言語的コミュニケーションから言語的コミュニケーションへの発達は、確かに泣きの減少過程である。それは乳児が泣かずに多種の行動形式を駆使できるようになる過程であり、情動の直接的表出から、情動とは分離した別の表現形式を用いる距離化あるいは抽象化の過程と考えられる。それは乳児が泣かずに待てるようになったり、自分の情動や行動を制御できるようになる過程でもある。

しかし他方においては、乳児自身の「つもり」が明確になるために、それまで泣かずにすんでいたことに対しても激しく泣いたり怒ったりするようになる過程でもあることを見逃してはならない。特に現実的な要求実現と自分の「つもり」が矛盾する場合には、現実的な要求実現の利益を捨ててまで自分の「つもり」を優先することへの発達が見られたことは重要である。目の前に差し出

されたものが自分のまさに要求していた目的物であっても、それを拒否し、目的物が得られないことに対してではなく、自分の「つもり」が無視されたことに対して、抗議をし始めるのである。

Piagetは表象の発生を、要求実現行動における手段—目的関係の内化というような現実適応の文脈でのみ扱うが、それに対し不適応に向かう表象がありうることを指摘した牧(1977)の見解は興味深い。乳児が自律的になり、意図的に各種行動形式を駆使できるようになる過程は、反面、乳児の内に形成される「つもり」が大きくなりすぎて、現実の問題解決からかえって遠ざかる危険をもはらむ過程と考えられる。

さて、このような乳児自身の「つもり」の発生は自己の形成の中心的部分をなすと考えられるのだが、本研究から、それが「嫉妬」の発生と関係するのではないかと推測できる。Yが姉を保護者としての母とは明確に区別して、子供仲間でもありライバルでもあると認知し始めた時期は、ちょうど「つもり」の出現期でもあった。Bridges(1932)以後、「嫉妬」の発生の研究はほとんどないが、「嫉妬」の出現には、自分の「つもり」と自分と競い合う他者への認知や評価及び自他の関係の意識化が必要で、ある種の情動—認知コンストラクトが形成されねばならない。行為の主体としての自己を意識し始める過程と他者との関係を意識する過程とは非常に密接な関連があるのだろう。特に自己を他者との関係の中へ位置づける(例えば、そのような概念カテゴリーをもつかどうかは別として、自分を「大人」ではなく「子供」と位置づける)働きは自己の形成を考察する上で不可欠だと思われる。「誇り」や「恥ずかしさ」などの発生についても同様に考えられる。現在乳児期への関心は0歳代から1歳代へと移行しつつあるが、これら複雑な情動—認知コンストラクトの形成に関する研究は今後の重要課題であろう。

なお当然のことながら、乳児の行動は環境条件との相互作用によって影響を受ける。BellとAinsworth(1972)によれば、母親の対応のしかたで乳児の泣きの頻度や生活に占める重要度にはかなりの個人差が生じる。本研究の方法論では「母親」を客観的に把握できないし、1ケースの検討なので、そのような個人差には言及できない。しかし、山田(1982)が示したように、乳児の使用する行動形式は、親など周囲の人間の働きかけで一方的に決まるのではなく、乳児自身の外界と内界の把握のしかた、つまり乳児自身によって主体的に形成される情動のあるいは認知的コンストラクトを反映しているはずであるから、外部に現われた行動からそのコンストラクトに迫り

たいというのが筆者の立場である。

本研究と同様の方法ですでに秦野（1981）などで共通の知見も得られ始めており、多くのケースが集積されれば、一般化や個人差への言及も可能になろう。もちろん、今後、本研究で得られた知見を仮説とし、調査法や実験法などでより厳密に検証してゆくことが必要である。

いずれにしても、本研究で、乳児が日常生活の中で示す非常に複雑な種々の行動の中のどのような行動に着目したらよいかを示し、それらの行動を位置づけ、関係づける枠組を提供するという目的の第1歩は達せられたと思われる。日誌研究は過去の遺物とみなされ、現在市民権を得た方法とはいえない。それは、心理学のどのような部分にどのような貢献が可能で限界はどこにあるかを明確にした上で、意識的に用いられてきたわけではないからである。反面、方法論的には一見厳密で正確にみえても、現実の何を解明するのか不明確な研究も多い。教育心理学が、野外（Field）のもつ豊富な知見を十分活用するためには、柔軟で多様な方法論を真剣に探究すべきであろう。

文 献

- Bates, E. 1979 *The emergence of symbols: Cognition and communication in infancy*. Academic Press.
- Bell, S. M. & Ainsworth, M. D. S. 1972 Infant crying and maternal responsiveness. *Child Development*, 43, 1171-1190.
- Bridges, K. M. B. 1932 Emotional development in early infancy. *Child Development*, 3, 324-341.
- Bruner, J. S. 1978 From communication to language: A psychological perspective. in Marková, I. (Ed.) *The social context of language*. Wiley, 17-48.
- 秦野悦子 1981 否定表現の発達 日本心理学会第45回大会発表論文集 512.
- Izard, C. E. 1978 On the ontogenesis of emotions and emotion-cognition relationships in infancy. in Lewis, M. & Rosenblum, L. A. (Eds.) *The development of affect*. Plenum. 389-413
- 川喜田二郎 1973 野外科学の方法 中公新書
- Lewis, M. & Brooks-Gunn, J. 1979 *Social cognition and the acquisition of self*. Plenum.
- 牧康夫 1977 フロイトの方法 岩波新書
- 大浜幾久子 辰野俊子 斉藤こずゑ 武井澄江 荻野美佐子 1981 母子相互作用における指さし行動の発達—時間標本資料の分析— 教育心理学研究, 29, 272-278.
- Piaget, J. 1936 *La naissance de l'intelligence chez l'enfant*. Delachaux et Niestlé (谷村覚・浜田寿美男訳 知能の誕生 ミネルヴァ書房)
- 斉藤こずゑ 武井澄江 荻野美佐子 大浜幾久子 辰野俊子 1981 生後2年間の伝達行動の発達—母子相互作用における発声行動の分析— 教育心理学研究, 29, 20-29.
- Spitz, R. A. 1957 *No and yes—On the genesis of human communication*— (古賀行義訳 ノーアンドイエス 同文書院)
- 山田洋子 1978 言語発生を準備する一条件としての三項関係の成立(1)—指さし, Showing, Giving などの出現経過— 日本心理学会第42回大会発表論文集 840-841.
- 山田洋子 1980 言語機能の基礎 心理学評論, 23, 163-182.
- 山田洋子 1981 言語は何によって準備されるか—5～18か月児の探索行動の縦断研究から— 愛知淑徳短期大学 研究紀要, 20, 57-67.
- 山田洋子 1982 初期の発話意味の発達(1)—食物と乗物を表わす名詞の使われ方— 愛知淑徳短期大学 研究紀要, 21, 93-106.

(1982年3月27日受稿)

ABSTRACT

EXPRESSIONS OF REQUEST AND REJECTION
AND THE EMERGENCE OF SELF IN INFANCY

by

Yoko Yamada

This study examined the developmental process of the request-rejection in communication from the stage before the emergence of speech to the using of speech. My son Yukichi (Y.) was observed at home and his detailed dairy records were kept by his mother from his birth to 30 months of age, and 2700 cards concerning his development were analyzed.

1. The development of the media used for request-rejection

When the communicative media used for a specific situation (e.g. feeding) were picked up, the following could be identified : crying→direct behavior (e.g. crawling away, sweeping hand movement) →gesture (e.g. head shaking) →speech (e.g. [næi, næi] meaning 'No').

The earlier media did not decrease the significance of communication or were not replaced with the later media but were freely combined. The most complex

combination occurred from 14 to 20 months of his age, and in this period, speech was no more than one of the various media. Following that period, speech began to play the most dominant role in his dairylife.

2. The relation between request-rejection and emergence of self-others differentiation

By the end of the first year, Y. could use different media properly toward any person in his family, and at 14 months, he behaved himself like a rival as well as a playmate to his sister. At this stage, the acknowledgement of his "Tsumori (image of intention or plan)" began to take over the giving effect to his request. The emergence of emotion-cognition such as feelings of rivalry or co-operation with his sister seemed to be based on his differentiation of self-others and the beginning of "Tsumori".